

## 新聞報道の外国人談話に見る男女差

— 文体と終助詞使用の関係を中心に —

谷 部 弘 子

### 1 はじめに

第26回夏季オリンピック大会が、7月20日より2週間にわたって、アメリカのアトランタで開かれた。オリンピック百周年という今回、女性の躍進がひとつの話題でもあった。国際オリンピック委員会加盟197カ国・地域のすべてから10,624人が参加し、うち女性の参加者が40%を占め<sup>(1)</sup>、記録的にも女性陣の活躍が目立った。

そんな中で、朝日新聞8月1日付の読者投書欄に次のような投書が載った。

「インタビュー 無神経な翻訳

○○△△(大学講師 67歳)

カナダのベーリー選手が百メートルを世界初の9秒84で制した。喜びの表情を満面にただよわせてゴールに飛び込むベーリー。競技後、日本の女性アナウンサーのインタビューに答えるベーリーは自信と謙虚さにあふれて、哲学者のような深い表情に見えた。

しかし、彼の語る言葉の翻訳が無神経というか、意図的な人種差別というか、不愉快だ。『努力をすれば、結果はついてくるんだよ』。ほんとうに彼はそう言ったのだろうか。かりにこれが、日本の谷口選手だったらどうだ。『努力をすれば、結果はついてきますから』となるに違いない。

黒人の言葉はことさらに教養のない、乱暴な言葉に訳される。

ベーリーにアナウンサーの質問が続く。『記録はこれからどのくらい伸びると見えますか』。私の語学力の及ぶかぎりでは、彼はきわめて標準的な英語で『目標はできるだけ速く走ることです。これからも完べきなレースをしたいと思います』と言ったはずだ。しかし、字幕には『目標はできるだけ速く走るとき。完べきなレースをしたいと思うよ』と、いかにも教養のない人間の言葉が映し出される。これは偏見からくる人種差別ではないか。』

この投書は、テレビ画面に映し出されたテロップを問題にしているが、筆者自身も連日の新聞報道を見ていて、日本人選手と外国人選手の談話の表現の差が気になった。記事中、選手たちの談話のかぎ括弧つきの直接引用の形で語られている。が、直接引用とはいえ、新聞の場合、紙面に限りがあるため、大なり小なり手が増えられているはずである。外国人選手の場合は、そこに翻訳という作業が入ることで、加工の過程がさらに一段階増す。発話の事柄部分が増えることは原則的にないにしても、終助詞や文体の選択如何で話し手の伝達態度が大きく左右される可能性は十分ありうる。先の投書は、翻訳談話が内包している、そのような危険性を指摘している。日本語は「判断・表現主体の主観的側面が高度に文法化された言語」<sup>(2)</sup>とさえ言われている。その日本語に翻訳する場合、話し手の判断や表現態度をどのような形式で表すか、が大きな問題である。とくに、文末に終助詞を添加するか否か、どのような終助詞を選択するかは、話し手の性や個性の規定に直接影響をあたえる。

本稿では、アトランタ・オリンピックの新聞報道における外国人選手の談話を資料とし、性の認定に関わる要素に着目して、調査・分析を試みることにした。若い世代を中心に話しことばの男女差がなくなっている現状<sup>(3)</sup>の中で、現代の言語状況に少なからぬ影響を与えているマスコミが、男女の言語表現に関してどのような規範意識を持っているかを明らかにしたい。

## 2 調査の概要

調査の目的：アトランタ・オリンピックの外国人選手の談話に見られる男女差を、文末表現に着目して明らかにし、分析する

調査資料：朝日新聞・読売新聞・毎日新聞の3紙 1996年7月20日～31日  
直接引用の形で現れる（「」づきの）外国人選手の談話

オリンピックは8月5日まで行われたが、各紙とも縮刷版の発行が約2か月遅れであることから、3紙そろった7月の12日分を対象とした。採集した談話は外国人選手のものに限った。各国役員、監督、外国人記者等の談話は扱っていない。なお、資料は談話単位及び発話文単位でデータファイル化し、

必要な要素を検索できるようにした。

### 3 調査の結果と分析

3紙から採集した外国人選手の談話数および発話文数は、表1の通りである。便宜上、同一記事内で同一人物が語っているものを1談話とした。また、談話中の句点、疑問符を区切りとして文を認定した。

表1. 3紙に見る外国人選手の談話数および発話文数

	発話者数			談話数			発話文数		
	女	男	計	女	男	計	女	男	計
朝日新聞	24	40	62	35	64	99	72	148	220
毎日新聞	31	36	67	38	44	82	119	112	231
読売新聞	30	52	82	35	64	99	93	164	257
計				108	172	280	284	424	708

#### 3.1 文体と男女差

新聞報道に見られる翻訳談話がとる文体は「ダ」体<sup>(4)</sup>が一般的である。採集資料の外国人選手談話も大半が「ダ」体で語られている。「デス・マス」体<sup>(5)</sup>で語られたものは、708文中26文にすぎない(表2)。これは、新聞という限られた紙面に最大の情報量を盛り込もうとした場合、当然とも思えるが、紙面の制約ということが文体を決定する唯一の要因でないことは、日本人選手の談話と比較した場合にはっきり現れる。たとえば、次の(1)~(3)の例に見られるように、日本人選手の場合は、男女を問わず、1談話全体での「デス・マス」体の使用がかなり見られるのである。

- (1) 「鳥肌が立ちました。旗は重かったけど、大勢の日本の観光客が日の丸を振っていたので、こちらもしっかり振りました。ひとつひとつがはっきりと見えました。」 (日本・女 0720 読売)
- (2) 「ソウル五輪以来で、前回出られなかったからうれしい。選ばれて誇りに思っています。テニスの普通の大会と違ってこんなに盛り上がって

感無量です」

(日本・男 0720 読売)

- (3) 「メダルの色はひとつ落ちたけど、ここ（五輪）に戻ってきて、もう一回メダルが取れました。予想以上の結果です」「ハイペースだったので、戸惑いました」
- (日本・女 0729 朝日)

これに対して、外国人選手の場合は、あくまで「ダ」体が主で、「デス・マス」体は臨時に挿入される形で現れる。

表2. 「デス・マス」体の紙面別使用状況

(発話文数)

	朝日			毎日			読売			3紙計		
	女	男	計	女	男	計	女	男	計	女	男	計
デス・デシタ	5	0	5	6	2	8	1	0	1	12	2	14
マス・マシタ	0	0	0	3	1	4	3	2	5	6	3	9
デショウ	0	0	0	0	0	0	3	0	3	3	0	3
計	5	0	5/220 (2.7)	9	3	12/231 (5.2)	7	2	9/257 (3.5)	21	5	26/708 (3.7)

( ) 内は各々の総発話文数比%

「デス・マス」体の使用は、2談話5文を除いて、女性の発話文である。では、なぜ、翻訳文が基本的に「ダ」体を採用しながら、女性の談話に多く「デス・マス」体が挿入されるのだろうか。「デス・マス」体26文中、「デス/デシタ」の形式で終わる女性の文は12文で、いずれも(4)(5)のような名詞・形容動詞文または「～ノダ」文である。

- (4) とっても光栄です。 (女 0729 毎日)

- (5) 今朝出場を決めたんです。 (女 0725 毎日)

これらを「ダ」体で表した場合、「とっても光栄だ」「今朝出場を決めたんだ」のようないわゆる男性形式になり、女性の談話文としては不適切な文になってしまう。<sup>6)</sup>このような事態を避けようとした結果が、「デス/デシタ」

形式の使用となっている。逆に、「ダ」体の「ノダ」終止文(29文)は、いずれも男性の発話文である。「デショウ」で終わる以下の3例がやはり、女性の発話者による文であることも、同様の操作によるものだろう。

- (6) なんて素晴らしい天気なんでしょう。(女 0730 読売)
- (7) キャシー(フリーマン)には悪いけれど、まだ若いのだから、いいでしょう。(女 0730 読売)
- (8) 気が弱いなんて言われているけど、ガッツを見せられたでしょう。(女 0730 読売)

女性談話として「～ダ/ノダ」「～ダロウ」の形では終わらせにくいことが、女性を意識した「デス・マス」体の使用につながっている。

「マス/マシタ」形式の動詞文については、「デス/デシタ」形式とは異なり、「ダ」体の中であえて「マス/マシタ」形式をとらなければならない必然性はないが、9文中6文までが女性の発話文である。おもしろいことに、男性の「デス・マス」体2談話5文はいずれも7月30日のカール・ルイスの発話文であった。この日、カール・ルイスは男子走り幅跳びで金メダルを獲得し、同種目五輪4連覇を達成した。新聞の論調は、カール・ルイス礼賛に傾き、彼自身の談話も「ダ」体から(9)(10)のような「デス・マス」体へと、丁寧度の高い文体へと移行している。

- (9) 「素晴らしい気分です。この砂を記念に持って帰ります。これまで9個のメダルを取ったけれど、今日の(メダル)が一番です。」(男 0730 毎日)
- (10) 「私の記録が破られることを願っています。このスポーツ(陸上競技)はすべてのスポーツと同じように、新しいスターを必要としています。」(男 0730 読売)

### 3.2 終助詞と男女差

「ダ」体、「デス・マス」体を問わず、文末に終助詞が現れる文は84例、全体の1割強である。紙面別の終助詞使用の状況は以下の表3の通りである。3紙の中では、読売新聞がもっとも多く、使用のもっとも少ない毎日新聞の3.5倍、終助詞使用の全文数の6割弱を占めている。終助詞の中では「よ」の使用がもっとも多く、「わ」「ね」が続く。以下、主な終助詞について出現傾向を見てみたい。

表3. 終助詞の紙面別使用状況

(発話文数)

	朝日			毎日			読売			3紙計		
	女	男	計	女	男	計	女	男	計	女	男	計
よ	1	6	7	0	4	4	2	18	20	3	28	31
わ	7	0	7	2	0	2	11	0	11	20	0	20
ね	0	3	3	0	4	4	2	6	8	2	13	15
さ	0	2	2	0	0	0	0	3	3	0	5	5
かしら	1	0	1	3	0	3	0	0	0	4	0	4
の	1	0	1	0	0	0	3	0	3	4	0	4
かな	0	0	0	0	0	0	0	2	2	0	2	2
な	0	1	1	0	0	0	0	1	1	0	2	2
ぜ	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	1	1
もの	0	0	0	1	0	1	0	0	0	1	0	1
計	10	12	22 /220 (10.0)	6	8	14 /231 (6.1)	18	31	49 /257 (19.1)	34	51	85 /708 (12.0)

( )内は各々の総発話文数比%

#### 3.2.1 「よ」と「ね」の使用状況

もっとも使用回数の多かった終助詞は「よ」で、計31文に現れた。今回の調査資料は新聞記者のインタビューに答える形で進められる談話である。したがって、選手談話の内容は基本的に聞き手にとって未知の情報である。聞き手の知らない話し手に関する事実を、聞き手に強く伝えたい場合に「よ」が現れるとすれば、男女を問わず、どちらにも同じ量の「よ」が使用されてよいはずである。が、実際には女性の発話文に「よ」が現れることは少ない。

31文中28文までが、男性の発話文である。女性の使用例は(11)~(13)の3文にとどまる。

- (11) シドニーで勝つなんて無理よ。 (女 0730 読売)  
(12) この結果はハードワークのたまものよ。 (女 0724 読売)  
(13) とても複雑な気持ちよ。 (女 0728 朝日)  
(14) 大切なメダルだよ。 (男 0731 朝日)  
(15) メダルはないけど頑張ったよ。 (男 0730 読売)  
(16) 大会前の練習ではイライラが募ったけど、本番を迎えてきょうのように走れるとうれしいよ。 (男 0727 毎日)

「ダ」体に「よ」を直接下接させた形 -「メダルだよ／頑張ったよ／うれしいよ」- は一般に男性形式ととらえられている。(14)~(16)のような男性発話文をいわゆる女性形式にしようとするれば、「デス・マス」体に移行して「よ」を下接させるか、あるいは、「わ」を添加して「~わよ」という形をとらなければならない。ただし、名詞文であれば、名詞に直接「よ」を下接させただけで、「ダ」体を生かすことが可能である。(11)~(13)に見るように、女性の発話文は3文とも名詞文である。女性の発話文に「よ」の使用が少なく、いずれも名詞文であったのは、「ダ」体動詞文、形容詞文に直接「よ」を下接させる形式が女性の談話形式として適切ではないという制約があるためと思われる。なお、「~わよ」の形式が見られなかったことについては、次節で述べる。

「よ」と対極をなす、終助詞「ね」で終わる発話文は15例見られた。うち女性の発話者によるものは(17) (18) の2文のみである。

- (17) 二人ともグレーの髪になってから、一緒に座って今日の話を話し合えるような友人になりたいね。 (女 0724 読売)  
(18) 日曜の朝9時にパジャマ姿で採尿とかね。 (女 0724 読売)  
(19) やっぱり、自分にはつり輪しかないようだね。 (男 0730 読売)  
(20) いろいろなやり方で走っておきたいからね。 (男 0730 毎日)

先に述べたように、選手談話は、現実には取材に当たった記者の質問に選手が答えるという対話形式で進められる談話でありながら、紙面には選手の回答部分がまとめて独話形式で提示される。ある意味では特殊な談話形態である。選手はもっぱら話し手として聞き手である記者に情報を提供する。こうした談話の性格上、話し手・聞き手が共有する情報について、聞き手に確認や同意を求める意味で「ね」が用いられる必然性は少ない。例えば、大曾1986が例としてあげている次のような場面では、「ね」は必須といえる。

「きょうはいい天気ですね。」 「そうですね」

この場合、「ね」を付加しない「きょうはいい天気です。」 「そうです」という対話は明らかに不自然である。それに対して、聞き手に同意・確認の回答を求めているととれるのは、15例中(17)の1例のみである。(17)の「ね」はインタビュアーである記者ではなく、となりにいる選手に向けられた発話である。その他の例はいずれも、聞き手にとって未知の情報を述べており、「ね」をつけるか否かは随意的である。聞き手である記者は選手談話に「ね」を添加することによって、読者との一体化を図ろうとしているのだろう。このような「ね」で終わる文が女性発話文に少ないのは次節で述べる「わ」の使用とも関係すると思われる。<sup>(7)</sup>形式上多かったのは、話し手自身の前文を受けてその原因・理由を述べる形式に「ね」を添加させた形「～からね」で、6例あった。

### 3.2.2 「女性専用」「男性専用」形式の使用状況

「わ」は一般に女性専用の終助詞と言われる。ここでも「わ」で終わる20文の発話者は、すべて女性である。20文中、動詞文が15例、形容詞文(否定文を含む)が3例、名詞文(「～ダッタ」)が2例である。

- |                        |             |
|------------------------|-------------|
| (21)  でも、頂点に立ったんだわ。    | (女 0722 朝日) |
| (22)  お客さんも喜んでくれたと思うわ。 | (女 0731 読売) |
| (23)  でも、最初のがいちばんいいわ。  | (女 0726 読売) |

(24) まるで、おとぎ話の中にいるみたいな幸せなゴールだったわ。

(女 0730 毎日)

(21) 文は「ノダ」文に「わ」を下接したもので、「頂点に立ったんだ」というのはだか形式では女性の発話文として不適切だ、という判断からの選択だろう。その他の文は、いずれの場合も「わ」の使用は随意的である。

「わ」の使用状況については、いくつかの報告がある。例えば、遠藤他1989は、テレビ番組の22人の女性に対するインタビュー<sup>(8)</sup>を資料として、女性の話しことばについて分析をしているが、文末が終助詞の「わ」で終わる例は2056文中1件もなく、「わね」の例が2例あったのみだと、報告している。また、職場における女性の自然談話を資料とした尾崎1994の調査でも、「わ」「わね」の事例は、対象とした734文中各1例しかみられなかった、ということである。これら現実の使用状況から見ると、今回の調査資料に現れた284文中20文という数値は、やはり大きいと言えるだろう。<sup>(9)</sup>

前節で、男性の発話文には終助詞「よ」の使用がかなり見られたにもかかわらず、「ダ」体で女性が「よ」を下接させる一般的形式である「～わよ」は1例も見られなかったことについて述べた。現実には「～わよ」の使用は「わ」よりもさらに減少傾向であることから敬遠され、「わ」のみの添加形式が選ばれたのであろう。つまり、「よ」や「ね」の持つ機能を代替する形で、女性談話に「わ」が多く使われているということがいえるのではないか。聞き手への伝達態度を強める形式としては、「ノダ」文もあるが、これも、「～んだ」というのはだか形式では女性の発話文として使いにくく、「デスマス」体に移行するか、「わ」を添加させた形にせざるを得ない。

このほか、女性形式とされる終助詞の使用例として、「～かしら」が4例、「～もの」が1例、女性の発話文に見られた。外国人選手の談話について言えば、依然として、女性の話しことばに対するステレオタイプの規範意識が見られる。なお、同じ選手談話でも、日本人選手の談話はより現実に近い形で報道されていると考えられるが、もっとも終助詞使用の多かった読売新聞の場合でも、女性専用と言われる形式で終わる発話文は1例もなかった。

男性専用と言われる「さ」「ぜ」の発話者は、やはりすべて男性である。「はじめに」で紹介した投書が1例としてあげた「さ」の使用は数としては多くない。「さ」の使用例は(25)～(29)の5例(うち(25)(26)は同一発話者による)、「ぜ」の使用は(30)の1例であった。

- (25) 僕は、米国が世界で一番バスケの強い国だと証明できればいいのさ。  
(男 0720 読売)
- (26) それがゲッター(貧民街)流さ。  
(男 0722 朝日)
- (27) 世界記録保持者に次ぐ2位は悪くないさ。  
(男 0723 読売)
- (28) でもロスは僕の第2の故郷さ。  
(男 0730 毎日)
- (29) この色が一番いいと思っただけさ。  
(男 0730 読売)
- (30) オレは人生の6年間のすべてをささげてきたんだぜ。  
(男 0731 読売)

「ね」や「よ」がある特定の談話場面において不要不可欠な要素となるのに対して、「さ」「ぜ」をつけるかつかないかはまったく随意的である。経歴、性格、態度など発話者にまつわる様々な情報が言語形式に反映しているものと思われる。また、(25)には「僕ら」、(30)には「オレ」という人称が使われているが、人称の選択も終助詞の選択と同様、選手の個性の規定に大きく関わっている。ちなみに、「おれ/オレ」は7例あり、1例を除いて黒人話者による発話である。

以上、外国人選手の談話に現れる主な終助詞使用の発話文について見てきたが、次節では、日本人選手の談話にくらべ、なぜ多くの終助詞が外国人選手の談話に現れるのか、その原因について考えたい。

#### 4 文体と終助詞使用

外国人選手談話の文末表現に着目してみた結果、「ダ」体を基調としながら女性の発話文には男性の発話文より「デス・マス」体の比率が高く、また、終助詞の使用には「女性専用」・「男性専用」形式の選択が見られた。これ

が外国人選手談話の特徴であることを明らかにするために、もっとも終助詞使用度の高かった読売新聞を取り上げ、日本人選手談話との比較を試みた(表4)。

表4. 読売新聞に見る日本人選手談話と外国人選手談話

表4-1. 「デス・マス」体使用状況

	外国人選手談話			日本人選手談話		
	女	男	計	女	男	計
デス・デシタ	1	0	1	18	20	38
マス・マシタ	3	2	5	31	20	51
デシヨウ	3	0	3	0	0	0
計	7 /93 (7.5)	2 /164 (1.2)	9 /257 (3.5)	49 /244 (20.1)	40 /164 (24.4)	89 /408 (21.8)

表4-2. 終助詞使用状況

	外国人選手談話			日本人選手談話		
	女	男	計	女	男	計
よ	2	18	20	1	4	5
わ	11	0	11	0	0	0
ね	2	6	8	6	3	9
さ	0	3	3	0	0	0
かしら	0	0	0	0	0	0
の	3	0	3	0	0	0
かな	0	2	2	0	0	0
な	0	1	1	1	0	1
ぜ	0	1	1	0	0	0
計	18 /93 (19.4)	31 /164 (18.9)	49 /257 (19.1)	8 /244 (3.3)	7 /164 (4.3)	15 /408 (3.7)

( ) 内は各々の総発話文数比%

一見して明らかのように、外国人選手談話と日本人選手談話とでは、「デス・マス」体の使用状況と終助詞の使用状況がちょうど逆転した関係になっ

ている。日本人選手談話の場合、「デス・マス」体でも終助詞でも発話文数において男女の差はほとんどなく、むしろ男性の方が比率が高くなっている。また、「デス・マス」体と終助詞の関係について見ても、外国人選手談話の終助詞が「ダ」体と結びついているのに対して、日本人選手談話は15例中12例まで「デス・マス」体と結びついている。つまり、性差が現れない形式になっている。ちなみに、「ダ」体の終助詞使用例は以下の3文である。(31) (32) は同僚の選手への発話であり、(33) は独話として出されている。いずれも聞き手であるインタビュアーに向けた発話ではない。

- (31) 一緒に決勝に残ろうね。 (女 0724 読売)  
(32) どうして涙が出てきちゃうんだろうね。 (女 0727 読売)  
(33) 終わったな。 (女 0727 読売)

終助詞の中でも使用頻度の高い「ね」と「よ」の機能については、前述の大曾1986をはじめとして、話し手と聞き手が所有する知識や情報量との関わりや談話機能に焦点をおいた研究が近年盛んである。その中で、益岡1991は、ていねいさのモダリティー、つまり、普通体・丁寧体の区別を表すモダリティーとの関わりについて言及している。益岡は、丁寧体よりも普通体において「ね」「よ」が使われる頻度が高いという事実をあげ、それについて次のような考えを述べている。

「対話文における普通体と丁寧体の文との大きな違いは、話し手が聞き手に対して取る心理的な距離の遠近である。・・・聞き手との心理的な距離が近い場合には、聞き手の内部世界に関心を示すのは自然なことであるし、逆に、心理的な距離が遠い場合には、聞き手の内部世界に立ち入り過ぎることは不適切であるということになる。このことは、話し手の内部世界と聞き手の内部世界の異同に関する判断を表す「ね」と「よ」が、丁寧体よりも普通体の方に適合しやすいことを物語っている。」

(益岡1991 p. 105)

確かに、今回の調査結果からも、翻訳談話の「ダ」体の採用が、終助詞の

使用を必然的に多くしている、ということが言える。選手と取材記者という話し手と聞き手の関係から一般的に判断すれば、両者の心理的な距離は遠い。したがって、本来ならば、日本人選手の談話に多く見られるように、丁寧体（「デス・マス」体）で語るほうが自然である。翻訳の際にはおそらく、より中立的、中性的と判断して普通体（「ダ」体）を選択したのであろうが、それがかえって、終助詞の使用を多くし、ことさらに男女差を表面化させる結果となっている。

## 5 おわりに

以上見たように、外国人選手の談話では、日本人選手の談話に比べ、終助詞の使用が多く見られ、とくに女性談話において、通常の女性の話しことばにほとんど見られない「わ」で終止する形が多く採用されている。また、終助詞の使用は3紙によってかなり差が見られ、場合によっては談話から推し量られる選手の個性に大きな違いが出ている。

- (34) - a 私の名前はドノバン・ベリー。／ベンではない。／私は、ジャマイカ生まれのカナディアンプリンターのベリーだ。（読売）
- b 世界記録なんて、狙ってなかったよ。／時計を気にすると、調子が悪くなってしまうんだ。／陸上は趣味の一つだ。／オレの名前はドノバン・ベリー。／関係ないことはいわないでくれ。（毎日）
- (35) - a スポンサーなどからの援助を糧に練習に専念した結果。／話すことはない。（朝日）
- b 自分のせいでないことでチャンスが奪われたなら、フェアプレー精神はどこにあるの。／世界のトップ20に入ったら、いつでも抜き打ちテストに応じなければならないの。／日曜の朝9時にパジャマ姿で採尿とかね。／わたしはこの3年半、この大会に魂をささげてきた。この結果はハードワークのたまものよ。（読売）

(34) (35) は、同一話者の談話であるが、読者がこの二つの談話から受け取る話

し手のイメージはかなり異なったものになるのではないだろうか。もちろん、同一話者であっても、そのときどきの場面や感情に応じた言語形式がとられてしかるべきであるが、上記の例は同一月日の談話であり、訳者の印象に規定される側面が強い。

外国人選手であれ日本人選手であれ、同様の聞き手による、同様の場面でのインタビューである以上、外国人選手の談話形態を特殊なものにしない配慮が必要であると考えます。

## 注

- 1 読売新聞1996.7.20(4版6面)
- 2 益岡1991 p.30
- 3 小林1993、他
- 4 =「常体」あるいは「普通体」
- 5 =「敬体」あるいは「丁寧体」
- 6 鈴木1993では、女性が使用できない語形式として、以下の5形式をあげている。  
a. 動詞・補助動詞の命令形、禁止の「な」 b. 文末の疑問を表す助詞「か」「かい」「だい」 c. 話し手の意志を表す助動詞「う・よう」「まい」 d. 話し手の推量を表す助動詞「だろう」「まい」 e. 断定の助動詞「だ」
- 7 陳1987は、話し手のほうが聞き手よりよく知っていることについてのべる文につく「ね」について、「聞き手自身の認識を成立させることのほうにかなりの重みがあって、それをいえば、聞き手も『ナルホドソウカ』とってくれるだろうというような期待があるようにおもえるのである。(この点は、女性語の『わ』とにている。)」としている。(pp.99-100)
- 8 NHKテレビ番組「おはようジャーナル」(1987.1~89.6)の中の話題の女性に対する約15分のインタビュー
- 9 遠藤他1989も尾崎1994も自然談話を資料としているので、1文の認定基準は、文字談話を資料とした今回とはもちろん異なる。発話文数の比較は使用の多寡の目安にすぎない。

## 【参考文献】

伊豆原英子 1992 「『ね』のコミュニケーション理論」『日本語研究と日本語教育』名古屋大学出版会

- 伊豆原英子 1994 「終助詞『よ』の使用と使用制約—情報と待遇性の関わりから『よ』の使用条件を探る—」『名古屋大学 日本語・日本文化論集』第2号 名古屋大学留学生センター
- 遠藤織枝・小林美恵子・卓星淑・丸山和香子 1989 「女性の話しことば—テレビのインタビュー番組から—」『ことば』10号
- 大曾美恵子 1986 「誤用分析 I 『今日はいいい天気ですね。』—『はい、そうです。』」『日本語学』9月号
- 尾崎 喜光 1994 「終助詞について—脱『女性専用語』使用の傾向」『職場における女性の話しことば—自然談話録音資料に基づいて—」（財団法人東京女性財団1993年助成研究報告書）現代日本語研究会
- 片桐 恭弘 1995 「終助詞による対話調整」『月刊言語』11月号
- 金水 敏 1993 「終助詞ヨ・ネ」『月刊言語』4月号
- 小林美恵子 1993 「世代と女性語—若い世代の『中性化』について—」『日本語学』5月臨時増刊号（特集 世界の女性語 日本の女性語）
- 鈴木 陸 1993 「女性語の本質—丁寧さ、発話行為の視点から—」『日本語学』5月臨時増刊号（特集 世界の女性語 日本の女性語）
- 泉子・K・メイナード 1993 『会話分析』くろしお出版
- 陳 常好 1987 「終助詞—話し手と聞き手の認識のギャップをうめるための文接辞—」『日本語学』10月号
- 益岡 隆志 1991 『モダリティの文法』くろしお出版